

前橋城主ゆかりの地蔵尊と地蔵尊祭

江戸時代の中期、「下馬將軍」とも言われた前橋藩九代藩主酒井雅楽頭忠恭（うたのかみただずみ）の四男として忠温（ただなが）が生まれました。忠温の養育係が戦国時代から小坂子城主を務めていたといわれる五十嵐家の久長（ひさなが）でした。忠温は八重子という女性と結婚しました。八重子は子宝に恵まれますように、地蔵菩薩を信仰して祈ったそうです。その甲斐があつて、享保21（1736）年3月に待望の赤ん坊が生まれましたが、難産で八重子は亡くなつてしまいました。忠温は嘆き悲しみ、供養のために八重子が信仰していたお地蔵様を作り供養することにしました。忠温はこの頃、親戚筋であ

る伊勢崎藩主・酒井下野守忠告（しもつけのかみただつぐ）家に養子に行くことになり、急いで一寸八分（5センチ程度）の金銅の地蔵尊（写真）をつくり、養育係であった久長に命じ、小坂子の向原（今の地蔵尊会館付近）にお堂を建てて祀らせました。延享2（1745）年7月22日に忠温はお堂を参拝し、久長に黄金20両を与え、後々までお堂を守るように言いつけました。

宝暦11（1761）年、このお堂に籠つてお地蔵様を供養していた佐渡出身の善休（ぜんきゅう）



金銅の地蔵尊

というお坊さんが万人を救えとのお告げを聞いたそうです。村人は相談して高さ2メートル40センチの石地蔵を建てて、子どもたちが健やかに育つようにと祈願するようになりました。その後、文政5（1822）年には子供に限らず全ての人の幸せを願い、1メートル50センチの石地蔵も建てました。これが地蔵尊会館の庭に鎮座する二体の子育て地蔵です。お地蔵さまにはご利益があると、縁日の7月と8月には遠方からも多くの参拝者があつたそうです。村の青年団の盆踊りや露天商の出店など、賑やかな祭りでした。

戦後、お祭りも休止となつていましたが、平成4（1992）年に自治会主催の地蔵尊祭りが復活しました。祭りでは子供たちが「つらぬき」と言つて、町内の家々を回り、寄

付金を集めます。「つらぬき」には諸説があるようですが、強い意志をもつて貫く、やり遂げるといふ説もあります。祭りの時には、金銅の地蔵尊は仮宮に安置されます。地蔵尊は代々自治会長が預かつていますが、昭和20（1945）年の米軍の前橋空襲で時の自治会長宅が全焼しましたが、奇跡的に灰の中から見つかったそうです。

コロナ禍のため、令和2年夏の祭りは中止となつてしまいましたが、代わりに8月22日に小坂子公民館館内で地蔵尊をお祀りし、多くの町民が拝観しました。（写真）これからも前橋城主ゆかりの地蔵尊は、子どもたちの健やかな成長を見守つ

てくれることでしょう。

生涯学習奨励員

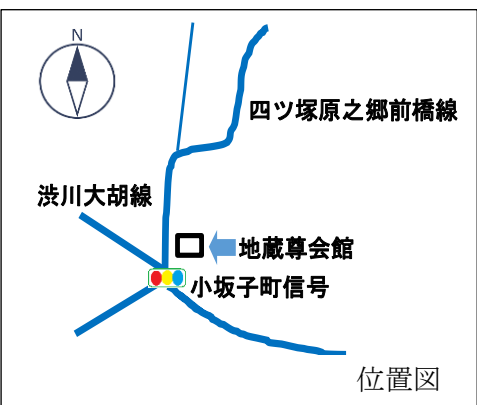
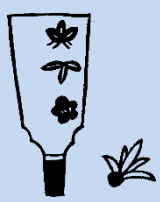
小見 耕一



地蔵尊供養祭

1月の主な行事予定

1月4日(月)芳賀公民館仕事始め



位置図